

- 7:00 起床。VANSANA HOTEL で朝食。
- 8:00 ホテル前からツアー車出発。前日のフィンランド人グループと同乗。計5人のツーリストと運転手、ガイド（一昨日に折衝した旅行社の若者）
モンの村、プータイ族の村、タンピウの洞窟、昼食、Hot spring を廻るコース。
- 14:00 ホテル帰着。
フィンランド人グループは、即、荷物をまとめ、空港へ。我々より早い便でビエンチャンへ向かう。
我々は、昨日ランドリーに出した洗濯物を受け取り、価格について少しトラブルの後、午後4時頃、ホテルの車にて空港へ向かう。
- 17:35 シェンクアン空港を離陸。
機内で水とファーマーズショップ製の果物加工菓子が提供される。約30分の飛行である。機内には足にギブスをし、点滴のビンを持った病人も同乗。
例によってルアンプラバン発ビエンチャン行きの機に途中から搭乗することになる。
- 18:05 ビンチャアン空港に着陸。
空砲には同行者の友人、Tさん、Mさん（ビエンチャン在住日本人）がホンダアコード（ジューデル車）で出迎えに。チャンタパンヤホテルまで送っていただく。チェックイン後、すぐにラオス風焼き肉店で夕食を共にすることにする。
Tさんの男友達（Kさん）も途中から合流。5人でタラフクに牛タンを食し、ラオビアを10本。少し飲み過ぎ。
3人と別れ、Yさん（ビンチャン在住日本人）の待つ、Bar Jazzyへ出向き、ラオス旅行の印象などを話す。
- 22:00 ホテル帰着。同行者は自室へ帰る。

【モンのVillage】



←この地域だけではなく、夫々の集落で全ての農家にこのマークが掲げられている。人口把握や徴税の基礎資料になるのか。





豚は首に▽形に組んだ木が装着されており、何処にでもやたらに出入り出来ない工夫がなされている。放牧状態であるが、自ずと動線が決まる。優れた工夫である。中国南部の黒豚の系統と思われるが、在来のモノだろう。この豚は美味だと思われる。バナナ、やし、サトウキビが見られる。

その他家畜では七面鳥、鶏。

この村はベトナム戦争の廃物を生活に利用していることで知られている。



村の穀物（米）貯蔵庫。
砲弾の薬莖が高床の土台に使われる。半分に縦割りしてある。米はモミで貯蔵



左は野菜のプランター。
右は柱に。





←何故かフェンス代わりに使われる。保管してあるのか。



村の鍛冶屋。フィゴの送風は近代的。
農機具を制作したのであろうが、この施設があるから金属加工によって、したたかな廃物利用が出来たのではないか



村の小学校の風景。
左は校舎。運動場にはサッカーのゴールポスト。
遊ぶ子供たちの姿。



【プータイ族の村】



糸に撚りをかける。
右は小さな玉葱を選別する老婆、
100歳だと言う。



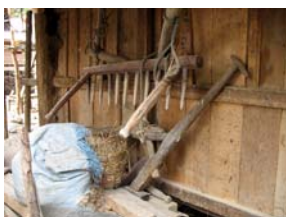
清流が流れる。野菜の洗い場になっている。
左下は流れが引き込まれ、水車を回して発電。
丸いタンクの中がジェネレーター。村の電灯をまかなっているとのこと。
優れた工夫。
流れのある村は何かにつけ、恵まれる



←ここでも酒造り。蒸留方法は同じ。



↑織物を持って売りに来る。捲きスカートの裾に使うもの。色使い、デザインとも気に入ったものである。
40000Kだと言う。帰途に立ち寄る事にしたが、帰路は別のルート。そのままになった。



←屋根をスレートに張り替え中

←鋤と代掻き用具。高床の下には耕運機が。

【タンピウ (Tham Piu) の洞窟】

ベトナム戦争当時、アメリカの戦闘機のロケット弾攻撃により、避難生活中の多数の市民が殺戮された洞窟。



平和を希求するラオス人民の記念碑的サイトとして、当局により管理されているようだ。

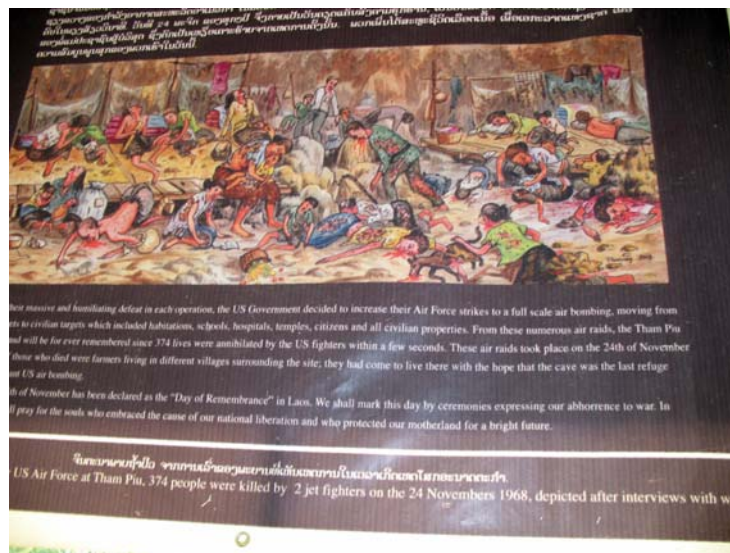
敵を明確にして、平和を求める国家意思の表明という意味があるのかも・・・このことにはあまり触れないことにしよう。

建物には2名の管理者、入口には子を抱く女性の象（例によって、芸術性に欠けるのが残念）



建物は履き物を脱いで入る。中には下の2枚の絵から始まって、人民軍の戦闘や悲惨な殺戮の状況、また、洞窟内の生活用品、遺骨などが展示されている。フラッシュの光の関係で展示品が鮮明でないのが残念。

少し、ニュアンスも含めて、忠実に英文に日本語訳を付けてみることにする。



↑彼ら（アメリカ軍）の作戦のそれぞれがことごとく、大量の人的被害と屈辱的な敗北をきつることになり、アメリカ政府は空軍の攻撃を増加させることに決定した。住民の住居、学校、病院、寺、市民と市民の財産をターゲットにした全開状態の空襲である。これらの数えきれない空襲によって、米軍の戦闘機の攻撃にさらされ、数秒間で374の生命が全滅させられたタンピウ洞窟は永遠に記憶されることとなる。死んだ者はこの洞窟周辺の異なる村に住んでいた農民であった。彼らは、この洞窟はアメリカの空爆から逃れるための最後の避難場所として希望を持ってここに来た。これらの空襲は11月24日に実行された。

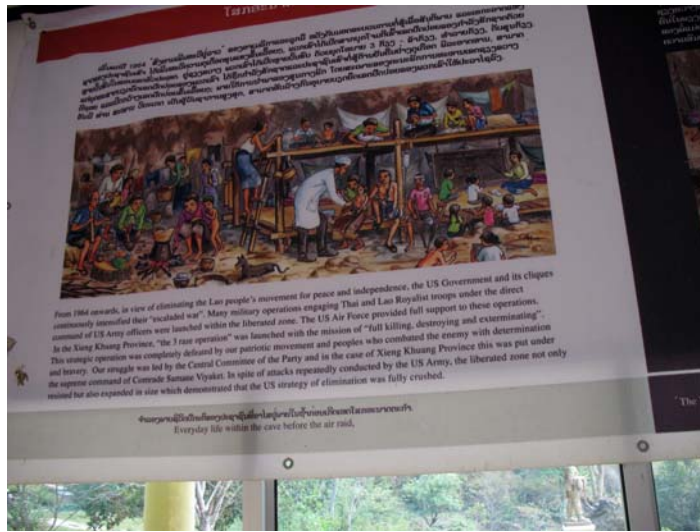
11月24日はラオスの「追悼の日」・・・忘れない日と訳するのが適当か（訳者）・・・として宣言された。

我々は戦争に対するわれわれの憎悪感を（戦争を忌み嫌い平和を希求する気持ち・・・前川註）表現する儀式によってこの日を印するものである。

彼らの魂は我々の国民の解放を生み出し、輝ける未来のために我々の母国を守ることになった。彼らに対して深い祈りを捧げるものである・・・そのことを抱きしめて彼らは死んだの意味・・・訳者註。

この絵は1968年11月24日、アメリカ空軍の2機の戦闘機によって374人が殺戮された。その時の生存者のインタビューから描かれたものである。

・・・抑揚を抑えた、事実に基づいたハードボイルドな名文であるだけに、心にせまるものがある・・・



1964年以降も、平和と独立に対するラオス人民の運動を無視して、アメリカ政府とその追従者は引き続いて、多くの軍事作戦をタイとラオス王国軍と連携させながら、しかも直接的にアメリカ陸軍の将兵の指揮のもとに、彼らの戦争のエスカレーションを強化した。そしてアメリカ空軍はこれらの作戦を全面的に空から支援した。

シェンクアンプロビンスにおいては、三つの「完全に破壊する作戦」が完全殺戮、破壊と絶滅の任務を負って実施された。

この戦略・戦術は我々の愛国的運動と決意と勇敢さをもって敵と戦った人民によって完全に打ちのめされた。

我々の苦しい戦いは党（人民革命党－共産党）中央委員会の導きを受けた。そして、シェンクアンプロビンスの場合においては、同志 SAMANE VIAKET の指揮のもとに戦われた。アメリカ陸軍の指導のもとに繰り返される攻撃にも拘わらず、解放区（Liberated Zone）は単に抵抗するにとどまらず、その区域を拡大させた。

これは我々を殲滅するとする彼らの戦略を打ち砕いたことの証明である。

・ . . . 此処に来て、英文は抑揚を抑えきれない、感情の高ぶったものになっている

このことについて、政府の意思表示に拘わらず、ラオス国民が如何なる感情で受け入れているのかが、興味あるところであるが、日本の我々の世代がベトナム戦争について持つ感覚とはいささか異なるアックラカンとしたところがあることを後日に痛感するはめにあうことになる。

我々の世代が広島・長崎について持つ感情と同じ感情をベトナム戦争と国の悲劇について、抱いているかに見える。広島島の原爆記念碑に刻まれている「安らかにお眠りください。あやまちは繰り返しませんから」との文章に象徴されるような、曖昧模糊たる平和概念。それに似たようなところがあることを感じる。

独占資本と軍国主義にアメリカがとって代わっただけで価値観の転換がない日本と、P. D. Rを樹立した国の国民である。自ずから、違う筈である。

タンピウ洞窟からの帰り道、サバイデイと挨拶を交わした女性の集団はラオス人であった筈だ。

それがラオス人であろうが無かるうが、ラオス人であったと信じたい。供養のロウソクを置いたのはラオス人と信じたいのだ。

この地が少なくとも、追悼の地になっていることを信じたいのだ。人民軍歴史博物館やカイソーン博物館ではラオス人は皆無の入館であったことと比較して

展示写真や物品の一部を紹介することとする。





撃墜された敵機の破片か、アルミニウムで敵機の形に作られた櫛。 →



人民軍歴史博物館やカイソーン博物館に展示されていたものと重複する写真もあり、またフラッシュの都合で画像が鮮明ではないが、説明文の一部を紹介する。

- ・ 同志〇〇と〇〇は敵の動向を聴き、抵抗活動を準備するため、シェンクアンプロビンスを訪問した。
- ・ アメリカの爆弾で傷つけられた僧や修行僧。多くの寺はアメリカの爆撃によって破壊された。
- ・ ラオス人民軍はシェンクアンのジャール平原の洞窟で活動している
- ・ シェンクアンプロビンスにおけるアメリカ軍の空襲によってできたクレーター
- ・ 軍の士官〇〇がアメリカ軍機を3発の銃弾で撃った。シェンクアンプロビンスなどである。



黒い穴が開く。入口の高さ約3M。奥行き2^{キロメートル}とも5^{キロメートル}とも言うが、よく判らない。夜は光が漏れるため、ロウソクの灯も使えない。

生活に必要なものは、なんでも揃えた。子どもたちに読み書きを教えた。病院の施設も揃えたとのこと。大規模な避難生活であったことが判る。左は放置された板きれであるが何故か、クロスに見える。水はこの洞窟から地下水脈になって大量が流れ出していた。現在は水路で引かれ、農業用水などに使われている。先に見た流れのある集落のように、周辺の山は水源になっているようだ。ただし、この水は飲料にならない。



← 供養のロウソクが入口の石に無造作に置かれている。



洞窟入り口まではかなりの傾斜の細い道が約300m続く。

青い札が見えるのは、犠牲者が発見された箇所。人数が書いてある。点々と青い札。逃げ惑う姿が想像される。



←入口を振り返る位置から撮影。後ろに見えるコンクリートの溝は水路。
洞窟の地下から流れ出す豊富な水。ラオス人女性のグループがサバイデイの挨拶をかわす。

入口から下方を望む。写真左上方の赤い屋根が管理施設。 →



←洞窟入り口から空を仰ぐ。この方向からジェット戦闘機が低空で侵入。ロケット弾攻撃。容易に照準を合わせやすい位置だ。

洞窟を離れ、チョットした街で車を停め、昼食。

政府関係の出先もあり、ムアンクーンの街と思われる。そうなら、シェンクアンプロビンスの旧県庁所在地である。メニューも複数あり、ライスに豚肉の生姜炒めをかけてものを食べる。これがなかなか行ける味。米も日本風で飯の感覚。

フィンランド人グループとテーブルを囲んで、少し、お互いのことを話し、会話。

60歳近いと思われる婦人はFAOの職員で4年、ピエンチャン在住とか。彼女がチリのFAO関係の知り合いとフィンランドの従妹を呼んで旅行中とのこと。ピエンチャン在住のFAO職員は2年前、国際会議に出席するため、京都を訪れたとのこと。京都の国際会議場で開催された農村婦人や生活改善などに関する国際会議とのこと。京都の観光ツアーにも参加し、エンジョイした。夏の京都は周囲が山に囲まれた地形のため、暑かった話題など。同行者がピエンチャン在住で農村婦人を対象に繊維の技術について訓練していること。当方が府県の農村開発、農林漁業、畜産を担当する職員であったことなどを紹介すると、それで、ラオス語を話すのかと納得。

同じ分野の仕事で、親近感が増したようだ。同じ行程で、本日シェンクアンからピエンチャンに行くとのこと。旅行社に追い立てられるようにして、次のポイントへ移動。

【ホットスプリング】

ここにも二人の村人が入場券をもぎる。・・・



写真のコンクリートで囲まれているのが泉源。硫黄の匂いもする。確かに熱い。50度位。
川に垂れ流し。麦わら帽子の女性が浸かっている箇所が適温。女性は日本からの観光客。
彼女とはシェンクアン空港で再会。同じ便でピンチャンへ。川には、河床の石で堰き止めが。子どもたちが水遊び。
のんびり。近くに、オーストラリア援助の観光客の休憩施設のような建物があるが、利用された形跡なし。



ホテルに帰着。VANSANA ホテルはラオス各地に展開する外国人観光客向けのホテル。
高台にある新築のホテルである。その下方には貧困（ごく普通の住居）が。ポールはフラッグ用。
玄関の温度計は30度近くを示す。今日も暑かった。
フロントでは同行者がランドリーの料金を巡って、従業員とやりとりしている最中。
1万Kで引き受けたものが3万Kを請求されたとか、アイロンがかけられていなかったとか。
フィンランド人グループは先に空港へ。

【シェンクアン空港】

